



ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報
No.21

発行日 2018年1月1日
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dousoukai@sadai.jp
ホームページ http://sadai.jp/alumni/nougakudousoukai/

巻頭言



生まれ変わる農学部

佐賀大学 農学部長 有馬 進

平成30年、明けましておめでとうございます。第22代の農学部長を拝命いたしました有馬進でございます。農学部同窓会の皆様には、日頃から、母校の教育・研究にご支援を賜り、感謝いたしております。なかでも、学生の就職につきましては、学長主催の就職対策会議への川副会長のご出席をはじめとして、OB・OGの方々の体験に基づくキャリア形成のご講義・ご講演、あるいは職場説明など、多大なご協力を賜っております。また、佐賀県庁支部ならびに教職員支部には、臨時職員採用に際してご尽力頂き、これまでに多くの就職未定者を救済頂いております。まずは、本紙面をお借りして御礼を申し上げます。

さて、農学部は、佐賀県民の農業振興に対する熱い期待を受けて昭和30年に設置され爾来63年、たゆみなく成長してまいりました。この間、優秀な卒業生を輩出し、地域農業、産業界、教育界等への貢献はもとより、学术界においても高い評価を得てまいりました。農学部は、農学科1学科で発足し、昭和43年には4学科（農学科・園芸学科・農業土木学科・農芸化学科）となり、その後、2回の改組を経て、応用生物科学科、生物環境科学科、生命機能科学科の3学科体制となっています。平成29年度現在、教職員76名、学部学生643名、大学院修士課程85名、大学院博士課程21名が日々、研鑽を積んでおります。そして、平成31年度には、現行の3学科を1学科「生物資源科学科」に再編する予定です。これまでの63年間で細分化した専門分野の壁を壊して組織としての体質改善を図り、融合による新たな研究の創出と

発展を目指しております。

かつての1学科の時代を過ごされた教官OBや卒業生からは、当時、教員と学生が人間的な温かい繋がりをもち、知恵を出し合って共に農学部を創り上げて来られた、と伺っております。農学部は還暦を経て、学部創設の原点に立ち返り1学科となって、地域の農水産業の振興の使命を果たすべく、再出発いたします。同窓会の皆様には、これから始まる農学部の新たな飛躍と発展の第2ステージを見守って頂けましたら幸いに存じます。

(S52年卒 農・経、S54年院修了 作物)

佐賀大学 農学部

【地域創生の中核となる人材育成】

— 生物資源科学科 —

生物資源を活用した地域創生

- 1 生物科学コース
生物シーズの開発と応用
- 2 食資源環境科学コース
農業基盤の整備と環境科学
- 3 生命機能科学コース
生物機能性の解析と応用
- 4 国際・地域マネジメントコース
経営・起業マインド・地域振興

地域と連携した教育研究推進

1学科4コースへの改組
(多様なニーズへの柔軟な対応)

参加者は年々増加で、交流さらに深まる

在学生と大学教職員・卒業生の交流会

今年も、在学生・大学教職員・卒業生の三者が一堂に会する交流会を11月22日に開催いたしました。

この日は「佐賀大学OB・OGによる業界セミナー」(対象は農学部3年、同大学院1年の在学生)が開催されており、例年、その後段にセットして同窓会が企画運営しているもので、4年目になりました。

前段のセミナーは農学部大講義室において、伊藤ハムウエスト(株)、久原本家グループ(初)、新日本製菓(株)、山崎製パン(株)、祐徳薬品工業(株)(初)の5社から人事担当と入社して数年の農学部OB・OGによる企業紹介や質問タイムで、ややかしこまっのやり取り。その後の交流会は、同窓会館に会場を移して、おでんを囲んで打ち解けた雰囲気の中、先輩・後輩談義で賑わいながら交流を深めてもらおうというものです。

加えて、交流会には県内の同窓会支部である、佐賀県庁、佐賀市役所、学校教職員、JAグループ(今回はJA佐賀中央会)の若手職員らも1日の仕事を済ませ、後輩達のために駆けつけていただきました。



まずは、熱々のおでんで腹ごしらえ

セミナーに参加した在学生78人のうち7割が交流会に参加、これに大学教職員、卒業生、同窓会役員等、合わせて約80人。年ごとに参加者は増えており、「セミナー+おでん会」として定着した感じになっています。また、農学部の男女比率が、男4女6ということもあり、この会も女子学生が圧倒的に多くを占めていました。

交流会の冒頭、農学部同窓会の川副操会長からは、同窓会のネットワークを生かして在学生の就職活動



身近な先輩や大先輩のアドバイスに耳を傾ける

のサポートに努めていくとあいさつ。鄭紹輝副学部長からは、面倒見のいい大学として就職ガイダンス等の取組み、さらに「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」(COC+)で掲げる地元就職率の向上が目標であり課題となっている現状を紹介されました。

乾杯の後、在学生は思い思いに企業・団体ごとのテーブルを回り、先輩たちに質問しアドバイスを受けていました。

最後に、若手先輩を代表して伊万里農林高校に勤務される山田大地さん(H22年卒 農・循環)が、自身の就職活動当時の体験を振り返りながら、在学生の今後の就職活動に熱いエールをおくっていただきました。



おでん鍋が空っぽになっても、盛んに交流

同窓会では、参加者にアンケート調査を実施しており、今後、同窓会としてできる在学生支援の検討に役立てていきたいと考えています。

小池 良美(S56年卒 農・経)

佐賀大学農学部・同窓会意見交換会を開催

平成29年12月5日に菱の実会館において、「佐賀大学農学部と同窓会との意見交換会」を開催しました。主な内容は次のとおりです。

1. 同窓会の主な取組について

【同窓会川副会長から】

先月22日に開催された在學生と同窓生との意見交換会（おでん会）には、多数の参加があり、就職セミナー参加企業の他、県内就職率を高める観点から、県庁支部、佐賀市支部、教職員支部、農協支部からも若いOB・OGに参加してもらい盛会に行えました。

学生数が減少する中、佐賀大学では地域との連携に力を入れられ、産学官の連携として市町行政や地域企業との連携活動が顕著で重要な役割を果たしておられることから、同窓会としても協力していきたいと考えています。

農学部卒業生が約7,600名おられる中、会員相互の連携を図っていくことが同窓会の使命であり、新たに同窓会会員になる学生の支援も行っていきたいです。



2. 農学部の現状と今後の方向

【農学部有馬学部長から】

農学部の改組について、現在、農学部内に3学科ありますが、改組後は「生物資源科学科」1学科となり、①生物科学コース、②食資源環境科学コース、③生命機能科学コース、④国際・地域マネジメントコースの4つのコースを設ける計画となっています。

地域の農水圏生物生産・利用技術等の高度化として、本庄キャンパスでは有明海・水産系の研究にも取り組み、アグリ創生教育研究センターでは唐津コスメティック・プロジェクトとも連携を図ること

しています。

また、地域創生に貢献する産学官共同研究の推進として、唐津市コスメティック構想や佐賀市バイオマス産業都市構想と地域間連携を図ることとしており、さらにはIT農業の推進を行います。

農学部就職委員会では、教育効果を検証するため、卒業後3年以内のOB・OGとその採用企業・官公庁の上司等を対象に各能力及び学習満足度に関するアンケート調査を実施し、卒業生の自己評価は控えめですが、採用企業等の上司等からは、まずまずの評価をいただいています。

3. 各学科の現状等【各学科長から】

出席いただいた各学科長の先生方から、卒業生の進路について報告をいただきました。就職が100%内定となっている学科があること、就職内定率が良い学科もあり大学院への進学を勧めていること、応用生物科学科では佐賀県内の就職が多いこと、生命機能科学科では食品系企業へ就職が多いこと、就職先としてはやはり企業が多いものの公務員へも進んでいること、などを詳しく報告いただきました。

4. 意見交換

意見交換では、同窓会の佐賀県支部から、大学、県、JA、そして生産者を加えた関係者が一体となり今後の佐賀農業の方向性「佐賀農業の再興」について話し合う必要があるとの意見が出されました。

次に、教職員支部から、農学部生の「理科」と「農業」教員免許取得状況についての質問があり、農学部より、農業の教育免許取得者は少ないが農業高校からの推薦入学者は農業の免許取得する割合が高く、意欲をもって取得していることが報告されました。

また、生徒の進学指導に役立てるため、農学部への編入学生数と編入後の学修の課題等についての質問があり、農学部より、編入学の枠10名に対しほぼ同数が入っていること、編入1年目は授業数が多く学生は大変で学力面で他の学生と差がみられるものの、2年目になるとほぼ学力差はみられないことが報告されました。

さらに、同窓会活動について、農業系高校では同窓会総会を2年に1回開催し、間の1年は役員総会等で総会に代えている事例もあり、会費収入が減少

している中、経費節減のための方策として検討したらどうかとの意見が出され、同窓会として経費節減の一つの方策として役員会に諮ることとしました。

熊本県庁支部から、熊本地震からの復旧と創造的復興のために、若く熱い力を必要としており、熊本県庁職員として「くまモン」とともに汗を流してくれる新規会員の加入を要望されました。

このほかにもいろいろな話題で意見交換を行い、有意義な会となりました。

田中 俊之（S59年卒 農・経）



食・農産業の未来を切り拓く ～農業版MOT特別講演会とアグリマイスターの会～

佐賀大学農学研究科では、平成29年10月27日、「食・農新ビジネスの展開と人材育成」をテーマに「農業版MOT特別講演会」を佐賀市で開催しました。MOT修了生をはじめ農業者・関係機関・団体、農業大学校学生など120名を超える参加の下に活発な意見交換が行われました。



特別講演会の第一部では、農林水産省九州農政局生産部長の下條龍二氏に「頑張っている九州農業」と題して基調講演をいただきました。九州農業の全国的な位置づけと特徴ある取組、直面している課題と国の具体的な支援策について詳細な資料をもとに最新の情報を報告いただき、麦・大豆の単収低下など生産力水準が不安定化し落ちてきていること、魅力ある米粉商品の開発とPRの必要性、野菜の加工・業務用需要の増大に対応した生産構造の改革、また果樹産地の強化へ向けた農地中間管理機構関連事業等を利用した園地基盤の整備推進等の必要性を課題として指摘されました。フロアからは農業の成長

戦略との関連で6次産業化の現状と今後の方向などについて意見が寄せられました。

第二部では、農業版MOT修了生から農業経営者の代表として古賀信一郎氏（MOT1期生：佐賀市光樹とまと部会長）、野村勝浩氏（MOT2期生：久留米市リーフレタス部会長）、本山智子氏（MOT4期生：佐賀市和糶副代表）、西寄大智氏（MOT7期生：佐賀市新規就農者）、異業種の代表として畑中敬史氏（MOT1期生：福岡市(株)はたな代表取締役）、古本尚士氏（MOT6期生：佐賀市佐賀共栄銀行）の6名をパネリストに迎え、「食・農新ビジネスの展開と人材育成」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

パネルディスカッションでは、①新ビジネスに取り組んだ背景とその内容、②新ビジネスに挑戦し、直面した課題と解決方策、③新ビジネスの展開と求められる経営者の要件（経営者像）の3点を柱に論議を進め、それぞれの経営哲学も含めて貴重な提言





がありました。経営環境の変化の的確な見極めの大切さや生産におけるムダ・ムラ・ムリの徹底的見直し、食材の本物の味への徹底したこだわり、消費者との双方向のコミュニケーションによるブランド力の向上、新規就農者でも容易に就農できるための経営の見える化への取組、さらに地域密着型金融機関としての地域農業活性化への多様な関わりなどが報告されました。いずれの報告でも、農産物を生産する人や農業・地域に対する想いを、それぞれの事業や商品を通して追求し、実現していこうとしている点に共通点があり、「楽しくなる農業」、「人に喜ばれる農業」の実現に向けて地域で頑張っている姿が多くの人々の共感を得ました。

フロアーからも、パネリストの自信に満ちた報告に、その情熱はどこから生まれるのか、もののブランド力ではなく人のブランド力が決め手になっているのでは、さらに若手の農業大学校学生からは新規

就農に際して農業技術をどのように習得しているのか、就農に対する不安はなかったのかなど活発な意見が寄せられ、若い学生と第一線で頑張る経営者などとの意見交流が出来たことも大変有意義でした。

アグリ・マイスターの会は、MOT修了生91名が組織する同窓会的組織であるが、それぞれ卒業会期別に現状の取組等を情報交換し、さらにMOT連携大学である韓国農水産大学校、忠北大学校、農協大学、東京農業大学オホーツクキャンパスからも参加をいただき非常に有意義な交流を進めることが出来ました。



今後ともヨコとタテのネットワークをさらに強固にして国際的連携を基盤に、MOT修了生の取組がますます発展し、大学と共に地域社会の発展に貢献できるよう期待したいと思います。

農学研究科特任教授 内海修一（S49年院修了 農経）

柳田晃良名誉教授（元生命機能科学科教授、西九州大学特任教授） 日本脂質栄養学会で「ランズ栄養功労賞」受賞



柳田晃良名誉教授は、2017年9月、東京千代田区学術総合センター・一橋会館において開催された「第26回日本脂質栄養学会」において、「ランズ栄養功労賞」を受賞されました。

これまでの活動において、栄養学の普及、栄養指導及び広報活動等を通じて本学会の発展に寄与されました。総会では受賞講演をされ、賞状及び楯の贈呈を受けられました。

大久保 惇（S47年卒 農・肥）



農学部研究室紹介

その⑬

応用生物科学科 生物資源開発学講座

動物資源開発学分野

教授：和田 康彦
准教授：山中 賢一

当研究室は佐賀大学文理学部の畜産学講座に始まり、教育研究分野の名称は何度か変更になりましたが、一貫して畜産学分野、特に家畜育種学と家畜繁殖学における教育・研究を行ってきました。その間、12名の教員が、のべ388名の学生を受け入れております。

現在の研究室のメンバーは教授1名、准教授1名、院生5名、4年生7名、3年生5名で、和田は2000年4月に当時の農林水産省畜産試験場育種部家畜ゲノム研究チームから移籍し、家畜家禽における有用遺伝子の探索と免疫関連遺伝子についての基礎的研究を行ってきました。現在は、家畜家禽の疾病対策を念頭において、おもに鶏を材料として乳酸菌などのプロバイオティクスやプレバイオティクスを飼料に添加したときの腸内細菌叢と腸や免疫関係器官における免疫関連遺伝子の遺伝子発現について研究しております。また、薬用鶏として有名な烏骨鶏についての遺伝子解析や活用方策についての検討も行っています。さらに、佐賀県酪農及び肉用牛生産振興審議会や佐賀県和牛改良検討会の会長などとして佐賀県の畜産、とくにトランプ大統領を招いて開催された安倍晋三首相主催の晩餐会でも供された佐賀牛の発展のお手伝いをさせていただいております。

人間が健康に成長・生活していく上で非常に重

要な栄養素を生産する畜産物の安定的生産には優良な個体を効率的に増やす必要があります、これまでに人工授精や受精卵移植といった様々の繁殖技術が開発されています。山中は、主に卵成熟、受精および初期胚発生過程で起こる事象に関する基礎研究に日々取り組むとともに、そこで得られた知識を活かした繁殖技術の高度化を目指しています。特に、近年の気候変動に起因する高温環境が家畜の繁殖性を大きく低下させることが大きな問題となっています。そこで、暑熱ストレスが生殖細胞に及ぼす影響を調べることで、夏季の繁殖性を改善したいと考えています。これまでに、受精卵の耐暑性を改善する物質の探索等の研究を行っています。また、近年では、不妊カップルの増加による高度生殖補助医療が盛んに行われています。本分野においても用いられる技術への応用も想定した研究を行っています。

なお、2017年の春の叙勲において岡本悟名誉教授が教育研究功労者として瑞宝中綬章を受章され、7月に研究室主催の叙勲受章祝賀会を開催いたしました。今後とも、2名の教員が力を合わせて家畜育種学と家畜繁殖学の分野を中心に畜産学の教育と研究に邁進し、多数の優秀な学生を育てていく所存ですので、同窓会の皆様のご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



職場では

宮島醤油、地域に根差した取組み

1. はじめに

弊社の食品生産は本社工場（佐賀県唐津市）、妙見工場（佐賀県唐津市）、宇都宮工場（栃木県宇都宮市清原工業団地）の3工場で行っています。その創業は、明治15年(1882年)にまでさかのぼります。昭和初期に建てられた白壁倉庫や大正ロマネスク様式の本社事務所は、今も健在しています。

農学部同窓生は、現在社内に17名います。農芸化学科卒（2名）、応用生物学科卒（10名）、生命機能科学科卒（3名）、生物環境科学科卒（2名）

ありあけ19号では、平成30年度に理系の学部と大学院を同時に改組する案の検討が紹介されています。



2. 昨年の弊社の活動の一端を報告します

みんなの科学 in 唐津、唐津10マイルロードレース、唐津まるごとマーケット in 天神など多くのイベントに協賛しています。

サガテレビのSAGAものスゴで12名、MONO_SUGO人で2名の若手社員が紹介されました。

2023年佐賀国体をめざすジュニアアスリート育成のため、佐賀県体育協会のオフィシャルパートナーを務めています。

唐津市には、国の特別名勝「虹の松原」があります。玄界灘から吹きつける強い潮風から地域の暮らしと農業を守るために作られた人工の森です。この森の環境保全に取り組んでいるNPO組



織（KANNE）が昨年6月、環境大臣表彰を受けました。弊社はこの森の一面の環境整備を受け持ち、草取り、松葉掻き等を行っています。また、「佐賀のしょうゆ」、「佐賀無添加味噌」、「佐賀県産和牛カレー」など「佐賀」シリーズの商品1個売上げごとに1円を佐賀県に寄付し、虹の松原の環境整備に使っていただいています。

また、食の大切さや楽しさを伝えたい。その思いから、工場見学、佐賀県内の小中学校に出かけて、味噌作り出前授業、しょうゆもの知り博士の出前授業を年に数回行っています。



3. おわりに

弊社では食品の品質管理と安全管理の国際認証であるSQF（Safe Quality Food）取得を目指してきました。2006年の宇都宮工場、2012年の本社工場に続き、昨年7月、妙見工場が認証を取得したことより、弊社の3工場は揃ってSQF認証工場となりました。

食べる事は人間にとって最も根源的な営みです。宮島醤油は地域に根差し、地域に貢献する企業として歩み続けます。山口 義巳（S59年卒 農・醗）



支部だより

佐賀県庁支部

佐賀県庁支部総会

平成29年度佐賀大学農学部同窓会佐賀県庁支部通常総会を、平成29年9月6日にグランデはがくれ(佐賀市天神2丁目)において開催しました。

今回、河津英紀、崎山将太、川内孝太、山崎勇介、平野剛史、山口栞、松本茜、伊藤僚汰、友澤佑斗、原田健太郎、村岡洋美、松本桃子、樋渡さくら、北川尚穂、井口瑤子、山下舞美【敬称略】の16名が新たに会員になりました。その結果、現在の会員数は241名となっています。

今回は女性にも多く参加していただき2人以上での参加申込み時の割引企画「乙女たちのお友だち割り」等を企画したため例年より多い51名の参加があり、また佐賀大学農学部同窓会から川副会長、吉賀副会長(佐賀大学農学部准教授)のお二人にも駆けつけていただき盛会に開催できました。

総会後の懇親会では、毎回恒例の「お楽しみ抽選会」も実施し、時間を忘れるほどに先輩・同輩・後輩と和気あいあいと懇談を楽しむことができました。同窓会の魅力、ここにありです。

平成30年3月に開催される「先輩を送る会」には、多くの会員の皆様に参加していただけることを期待しています。 溝口 宜彦(S56年卒 農・作)



熊本県庁支部

熊本県庁支部総会



熊本地震からの復旧と創造的復興に取り組んでいる熊本県庁職員の佐賀大学農学部同窓会通常総会が、8月25日(金)午後6時半からKKRホテル熊本において開催されました。

本部から有馬農学部長、小池副会長に参加いた

き、3年ぶりの新規加入者3名も加え総勢29名での開催となりました。

総会では、塩貝会長の挨拶に続き6月に急逝された前会長永井氏に対する黙祷の後、会計報告、役員改選が行われ、新会長に金島(S56)、副会長に淵上氏(S56)、監事に緒方氏(S57)、事務局に本田氏(H24)と田中氏(H25)が選出されました。

総会では、佐大農学部の近況報告に加え、農学部の染谷教授も関わっている「阿蘇地域の野草堆肥の有用性」を活かす様々な取り組みを、阿蘇地域振興局の坂本氏が紹介し、会員の関心を集めました。

その後懇親会に移り会員相互の親睦を深めるとともに、会員同士の結束力強化と来年の再会を約束して盛会のうちに閉会となりました。

金島 佳典(S56年卒 農・果)

農業土木学科

1972年に入学した私たちは、卒業年度は違えども共に学生生活を謳歌した仲間として2年に1度集い同窓会を行っています。今年は10月14日大分県日田市みくまホテルで開催しました。26名中14名の参加でしたが、40年以上前の学生の頃を昨日のこつのように思い出した楽しいひとときでした。2年後に福岡県で再会することを誓い、各々帰路につきました。

水田 和彦 (S51年卒 農・機)

72A農業土木学科入学 同窓会



山陰・北陸自転車一人旅

古川 辰馬 (S40年卒 農・育種)



島根：出雲大社入り口

定年退職後に始めたサイクリングは12年を経過した。日が経つにつれ距離も延び、8年前からは、年1回、数県をまたいで自転車で旅するのが恒例になった。これまで国内では、日本列島の太平洋側北上、北海道一周、九州一周などにトライしてきた。また海外にも足を延ばし、2年前には台湾を一周した。今年は無踏の山陰～北陸を走ったので、その概要を紹介する。

- ① 下関市をスタート地点とし、島根、鳥取、兵庫、京都、福井、石川、富山、新潟を経て長野市をゴールとするコースを走った。所要日数10日、総走行距離は約1,100kmに達した。
- ② 日本海に沿って走るこのコースは変化に富み、起伏が激しい。特に山間地では数えきれないくらいのトンネルを走った。トンネルの大半は歩道が

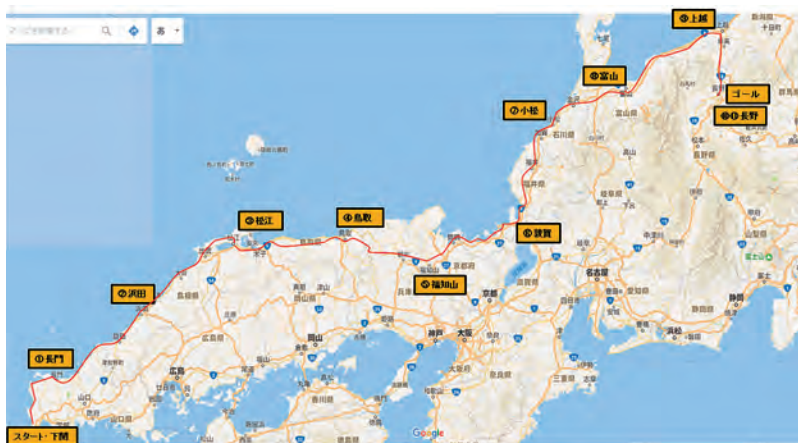
ないか、あっても危険を感じるほど幅の狭いものであった。このようなトンネルを走る時は常に緊張した。

- ③ 記憶に残った場所は、日本海を望む山口県北長門国定公園、青い空と群青色に輝く海、次々に現れる奇岩、遠くに浮かぶ島々、素晴らしい景観だった。

長野の北アルプスの山並みが日本海に落ち込む所は十数kmにわたり切り立った断崖である。糸魚川を走る国道8号線はこの断崖上を走っている。よくもまあこんなところに道を作ったものだと驚くと同時に先人の苦勞を思い知った。

- ④ 走行中、深刻なトラブルはなかったが2回パンクした。パンクする、しないは運としか言いようがない。今回は8日目に初めてパンクし、その日のうちに再度パンクした。これで準備していた2本のスペアチューブは使い切った。

自転車旅は、年を取るにつれ衰えてくる私のチャレンジ精神を喚起し、日常生活に張りを与えてくれる。足腰が動き、頭が働く間は自転車旅を続けていきたいと思う。



山口：北長門海岸国定公園



金沢：兼六園



長野：戸隠神社の杉並木



新潟：「親不知・子不知海岸」の断崖を走る国道8号

「山陰・北陸自転車一人旅」と題する旅行記が古川辰馬（S40年卒 農・育種）氏から寄稿されましたが、紙面の都合でその概要のみを掲載します。全文の閲覧は「佐賀大学同窓会ホームページ・農学部同窓会・同窓生の広場」でお願いします。または、同窓会事務局へお尋ねください。

会費納入のお願い

日頃より、同窓会活動に多大なご理解を賜りまして、厚くお礼申し上げます。

同窓会会報「ありあけ」の発行、総会・懇親会の開催、大学との意見交換会、支部助成活動、在学生への就職支援など、多岐に亘る活動をおこなっています。これらの事業は同窓会費で賄われており、同窓生の皆様には大変ご協力をいただいておりますが、近年は年会費納入率が極めて低く、同窓会運営にも支障を来しています。

出費多端のところ大変恐縮ではございますが、同窓会の趣旨をご理解の上、納入いただきますようよろしくお願い申し上げます。

なお、既に納入をして頂いている方につきましては誠に申し訳なくご容赦の程お願い申し上げます。

編集後記

新年明けましておめでとうございます。同窓生や在学生の皆様には、旧年中大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、同窓会誌「ありあけ」の編集担当をしまして、4年が経過いたしました。本誌の発行を持ちまして、次の担当者に交代いたします。この間、皆様方にはご理解とご協力をいただきましたことを改めて感謝する次第です。農学部同窓会誌の編集に携わりまして、農業と農学部の在り方について、考えさせられることが多々ありました。その一つに農業を担う農学部卒業生が少ないことです。これは、農学部が懐の広い学問で

あるとする証明かもしれませんが、他の学部ではあまり見られないことだと思います。先般ある大学の農学部の先生とお会いしてお話する機会があり、オランダの農業の話になりました。日本では農業後継者が不足していると言われていたのですが、オランダでは若い人の就農が多くて、次々と新しい形の農業が生まれているとのことでした。日本の農業も世襲ではなく、新しい人材、特に若い人たちがもっと就農しやすい環境づくりが必要ではないかと考えさせられました。このような観点で、日本の農業発展のために、農学部教育の充実も期待したいと思います。

編集担当：大久保 惇（S47年卒 農・肥）

協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、皆様より協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げますとともに、協賛各社の今後のご発展をお祈り申し上げます。



Hotel New Otani SAGA Lunch Buffet

ランチビュッフェ

2018 ~ 3/31 土

◎2/28&3/21は
“ホテルでいちご狩り”を開催

毎週 土 日 祝 開催

I部 11:30 ~ / II部 13:00 ~ (14:00 L.O.)

1年の始まりもやっぱり
オータニのランチビュッフェ!!

目玉料理

大人	シニア (65歳以上)	小学生	幼児 (3歳以上)
2,500円	2,200円	1,200円	600円

ご利用時間
80分

1月

●ビーフステーキ
(お一人さま一皿)

●表示価格は全て1名さま料金。税金・サービス料共

The New Otani

ホテルニューオータニ佐賀

〒840-0047 佐賀市与賀町1-2 TEL.(0952)23-1111(代) www.newotani-saga.co.jp



Grain & Pet Care Communication

株式会社 森光商店

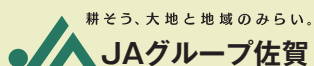
〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7
PHONE.0942-85-1125(代) FAX.0942-83-8868

ホームページ <http://www.morimitsu.co.jp>

地域と共に歩む。

JAグループ佐賀は「食」と「農」を基軸とした協同組合として、
地域の核となり、地域を支えています。

皆さまへ安全・安心な県産農畜産物をお届けし、地域の活性化に寄与するために、
地域のみなさまと共に歩んでまいります。



耕そう、大地と地域の未来。



JAグループ

検索

こだわり食品の店 井徳屋

佐賀市松原3丁目2-16 〈TEL〉0952-23-4373

佐賀の豊かな大地で育った農薬不使用栽培の野菜やお米、嬉野茶、無添加ハム、自家製酵母のパンなど美味しい地産の食品を取り揃えております。



ホームページからも
ご注文いただけます。

<http://www.itokuya.com>

